HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	レーニンと「労働者調査」
Author(s)	荒又, 重雄
Citation	北海道大學　經濟學研究, 27(2), 181-189
Issue Date	1977-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31388
Type	departmental bulletin paper
File Information	27(2)_P181-189.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜研究ノート＞

レーニンと「労働者調査」

荒又重雄

一

労働者階級自身による「労働者調査」をマルクスが重視しており，みずからそれを試みてもいたことは，彼による「国際労働者協会ジュネーヴ大会への臨時総評議会代表にたいする個々の問題についての指令」とか，『レヴュ・ソシアリスト』誌上に1880年に発表された101項目のアンケート表（『労働者調査』）などをもって，広く紹介されている[1]。

レーニンも，彼の社会活動のごく初期に，同様のアンケート調査の企画をもっていたのであるが，これについてはとくに紹介されたことはないし，したがって周知のことがらではない。以下に簡単に紹介する所以である。

二

周知のように，レーニンは，1893年ころから，ロシア社会民主主義の運動を，宣伝中心の運動から大規模な煽動をもなす運動へと発展させるために努力し，おりから展開しつつあった労働者のストライキ運動にビラ配布をつうじて影響を及ぼすとともに，ペテルブルグその他に労働者党の萌芽たる「労働者階級解放闘争同盟」を組織して行った。そのさい，労働者状態についての，客観的で具体的かつ詳細な情報を獲得することは決定的に重要であった。

レーニンは，日曜学校の教師としてすでに労働者たちと接触のあったクループスカヤから学び，日曜学校を通じてサークルに組織されていた労働者たちから直接に聞きとりしながら，労働者状態へと接近してゆき[2]，その成果は

労働者むけのビラとして労働者にかえされていったが，そうした系統的努力は，おのずから標準的質問表の形成へと導びくであろう。

おそらく1894年末か1895年はじめと思われる時期に，ペテルブルグの「労働者階級解放闘争同盟」によって出版されたアンケート Вопросник が今日までのこされている。このアンケートを紹介している資料集の編集者注記によると，それは，おそらく，レーニンによって作成され，ラフト Лахт にあった「人民の意志派」の印刷所で印刷されたものである。[3] 内容は以下のごとくである。[4]

(1) 事業所内の労働者数——男，女，未成年者，年少者，総数。

(2) いつ，どんな期間で，あるいは期間を定めずに，雇われたか。そのさい特別の事情はなかったか。(請負人，郷役場，アルテリその他を通じての雇傭)。

(3) 期限前に雇主が雇傭条件，たとえば賃率の違反をしなかったか。

(4) 期限前に労働者が雇主のもとから立去らなかったか。皆で一緒にか，一人一人でか。そのとき雇主はどのように振舞ったか。裁判所ないし監督官に訴えたか。他の雇主たちに通報したか。

(5) 労働は一昼夜につき何時間つづくか。夜業と休日労働はあるか。いつもか。ときどきか。交替番はどのようになっているか。時間外労働がしょっちゅうあるか。時間外労働や休日労働をことわれるか。

(6) 月々の稼ぎ выработка の情報。労働日数。男の仕事と女の仕事。一緒か別々か。一ケ月の稼ぎ，普通の労働者の，腕のいい労働者の，のろまな労働者の。賄いはどうなっているか。住居はどうなっているか。出来高作業か，日給か，月決めか。

(7) 時間外労働と休日労働に，いくらか高い支払いがあるか。

(8) 賃金は月に何回支払われるか。また何で支払われるか。貨幣か，現物か，売店で使うチケットでか。支払いのさいに不都合はないか。(遅配，勘定ごまかし，その他)。

(9) 最近，賃金が上がったり下がったりしたことがないか。もしあったと

き，これについて説明があったか。

(10) 賃金からの差し引きをルーブリとコペイカで示せ。アルテリに，売店に，借金返済に。

(11) 罰金表。月に一人当りでどれだけとられるか。罰金賦課に不都合なことはないか。

(12) 職長や雇主は労働者に対してどのように振舞うか。例を上げよ。

(13) 労働者の中に，工場秩序に対する不満はないか。その不満はどこにあらわれているか。暴動。この事業所でおこったすべてのストライキについて，また，その他の自分が参加したりあるいはよく知っているストライキについて，できるだけ詳しく知らせよ。いつ。どんな理由で何人参加したか。経過はいかに——平穏にあるいは暴動。軍隊は呼びよせられたか。どのように終ったか，勝ったかまけたか。そのように終った理由。

(14) 工場法は何か労働者の役に立つか。工場監督官はどんな人物か。労働者たちをどのように扱かっているか。彼の振舞いをいくつか例にあげよ。

(15) 事業所に工場売店と消費組合があるか。ある場合には次の表にかきこめ。ライ麦粉，小麦一級品，塩漬牛肉，脂，卵，ミルク，じやがいも，砂糖，塩，灯油その他の，市場価格と工場売店での価格。

(16) 労働者——独身と家族もち——は月にいくらかかるか。住居費，賄費（アルテリで，独居で），暖房費，照明費。年間に次のものはいくらかかるか。税金，義務の借金 Заем в до г，衣服，履物，タバコ，ウオッカ。

このアンケートは，レーニンによって作成されたものだとしても，唯一のアンケート表であったかどうかわからない。このアンケートに言及しているソヴエト研究者カシュカリョヴァ Л. Н. Кашкарева は，前記の資料集がイワノフ Л. М. Иванов によって公刊されてのちに，レーニンの質問表の案は，残念ながらいまだ発見されてはいないが，四つ切り紙四枚以上に，レーニンの細かい字体でかきこまれていた，とのべている[5]。もしそうなら，レーニンは上掲の項目よりなるアンケートよりも，もっと詳細なアンケート表ももっていたように思われる。しかし，ペテルブルグの「同盟」員の中に普及し，

イワノフ，モスクワその他の工業中心地にも見本がまかれたというアンケート вопросник[6]は，カシュカリョヴァが引用もせず，文献所在を指示してもいないけれども，上記の16項目のそれである可能性も強い。

このアンケートは，通読すればおのずと明らかなように，1886年工場法の想定するごとき労資関係を念頭においている。

三

1895年春，レーニンは「労働解放団」との接触を求めてプレハーノフ Г. В. Плеханов に逢いにゆく。そこで，レーニンの提案によって非合法論集『ラボートニク（労働者）』が「労働解放団」の編集によって国外で出版されることにきまった。1895年秋，ロシアに戻ったレーニンは，『ラボートニク』に労働者状態についての，とくにストライキについての論文，資料を送りはじめる。アクセリロード Аксельрод（「労働解放団」の一員）への書簡でレーニンは，自分が，トロントン，ラッフェルム，イワノヴォ＝ヴォズネセンスクでの，ヤロスラヴリでの，また，ペテルブルグ機械製靴工場のストライキについて資料をもっている，とかきおくっている。

その中の，イワノヴォ＝ヴォズネセンスクのストライキについては，シェステルニン С. П. Шестернин がレーニンのアンケート表を利用して最初の資料をあつめ，コンニヤク版で印刷したもの（С. П. Шестернин, Октябрьская стачка в Иваново-Вознесенске, 1895 г., Изд. москов. раб. союза, 1895 дек.）から，レーニンが再編集して『ラボートニク』に送っている。そこで注目されている諸点は，

ストライキを惹起した原因（賃率引下げ）

今年と昨年の賃率の比較，賃率引下げ率，年間の諸賃率の比較（冬と夏）

などであり，ストライキの意義の評価として，

「多分，労働者は打撃をこうむるであろうが，ストライキはその任務を果した。ストライキは，労働者たちは闘うことができ，自分たちの統一した力をもって工場主の圧迫にしっかりと対決できることを示した。」

とのべ，報告への附記として，ストライキ終結後の工場におけるあたらしい状態の資料をのせている。すなわち

「最近の消息によれば，工場監督機関は一日48カペイクの最低賃金を設定した。もし，織布工が出来高給が働いて，それより少い稼ぎしかないときには，彼らには48カペイクの日給が支払われなくてはならない。これはストライキ終結後に出されたことであるとはいえ，労働者の要求に対する大きな譲歩である。

労働者の統一した力は，その敗北さえもが勝利にかわらざるを得ないほどに，恐しいものなのだ。このことについて，とくに労働者の注意をむけるべきである。」[7]

労働者状態とストライキ運動についての資料がより豊富になり，『ラボートニク』だけではまにあわなくなって，1896年11月には『ラボートニク小新聞』（Листок ≪Работника≫）第1号がジュネーヴで出される。これには，1897年工場法をひき出したペテルブルグのストライキについての情報をはじめとして，ロシアの40以上のまちからの情報が，労働者自身の手によってあつめられて，掲載された。そのような，労働者自身による情報活動は，ツァーリ政府の目からみると，犯罪，破壊活動であり，憲兵はアンケート表を「犯罪活動」の証拠物件とみなした。

1895年および1896年の国事犯についての憲兵司令部の報告の中には，オデッサで労働者サークルのメンバーを捜索したさい，机からはさまざまな発禁出版物が，3人の服のポケットからアンケート表の写しが発見された，とある。その報告によると，オデッサの社会民主主義者が労働者状態を明らかにするために作成したアンケートは，39問からなっていた。その中には次のような問もみられた。

「仕事をことわるとき，法による2週間前の予告はまもられているか。訴訟があったとすれば，だれが，いつ訴えたか。

どのような労働災害が，どの程度ひんぱんにあるか。1895年には，だれの科で災害が発生したか。雇主は補償したか。だれに対していくら。裁判

によってか，それなしにか。

1895年における工場監督官の臨検。いつ。申告によってかそうではなくか。臨検はどんな結果に終ったか。

罰金。何に対して。いくら。労働者手帳にかきこまれているか。陳情はあるか。その陳情はだれにむかってなされ，どんな結果に終ったのか。」[8)]

1895年と1896年の国事犯に関する憲兵司令部の報告には，1896年に帝国の全域で出された革命的文献のリストがあり，とりわけて尋問調書に犯罪活動の証拠として添付すべき出版物の中に，印刷された「ロシアにおける労働者階級の状態に関する問い Вопросы о положение рабочего класса в России」があげられている。カシュカリョヴァによると，繊維労働者向けと，製鉄労働者向けの，それぞれ17問からなるアンケートが，1896年のそれと同じ題名で1898年に印刷されている。[9)]

四

1895年12月レーニンを含むペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」の活動家が逮捕された。一方，社会民主主義の内部にいわゆる「経済主義者」の一団が生長した。『ラボーチャヤ・ムイスリ Рабочая Мысль』によった経済主義者たちは，ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」の名で，1899年にあたらしいアンケート表「ロシアにおける労働者階級の状態に関する情報集めのための問い Вопросы для собирания сведений о положение рабочего класса в России」を出版した。

このアンケートは13部門 раздел からなり，全体で158項目 пункт あった。各項目は2～5あるいはそれ以上の問いからなっていたので，なんと全体で600問以上もあった。その部門構成は次のごとくであった。[10)]

Ⅰ　工場（7項目）

Ⅱ　工場における労働者と労働条件（15項目）

Ⅲ　雇用条件と賃金（37項目）

Ⅳ　労働日（15項目）

Ⅴ　労働者の上司，検収，罰金，住居，食物（14項目）

Ⅵ　学校，公衆読書室，図書館，書物，娯楽（24項目）

Ⅶ　法律部門。労働者の雇用，雇用契約の破棄，工場主と労働者との相互関係（11項目）

Ⅷ　標準労働日についての1897年６月２日法（７項目）

Ⅸ　年少者と婦人（６項目）

Ⅹ　罰金と罰金基金（８項目）

Ⅺ　工場監督官（５項目）

Ⅻ　訴訟（５項目）

ⅩⅢ　ブラックリストとストライキ（４項目）

この体系の中に含まれる問いの中には，次のようなものがあった。いわく，「雇主や工場支配人はどんな人物か（教養水準，性格その他。彼らは労働者に対しどのように振舞うか。」「非合法図書。労働者の中で多くのものがこれの普及にたずさわっているか。」「非合法組織があるか（共済基金，闘争基金，その他の同盟）。」

アンケートの体系が整然として厖大であることは，ツァーリ政府や工場主組織ではなく労働者自身が，労働条件についていち早く関心を示した証拠としても位置づけうるかも知れないが，その調査がなされる現実の社会的政治的環境の中において考えるならば，計画が空想的となり，権力につけ入れられるすきを大きくしていることを示している。

レーニンは，すでに労働者へのアンケートを企画したころから，同時に，ツァーリ政府の工場法を研究することを通じても（例えば論文「工場で労働者から徴収する罰金にかんする法律の説明」(1895年のパンフレット）労働者状態を研究し，また，多くのブルジョア的，ないしは専制的文献をつうじてさえ，ロシアの資本主義について研究していた。経済主義者たちのプランに対して，レーニンは大いに批判的であった。有名な論文『何を為すべきか』の中に次のようにある。「合法資料にだけたよっても，まだなんとか職業的パンフレットを書くことができるが，非合法資料だけにたよっては，これは不

可能であるといっても，誇張ではないであろう。われわれは，『ラボーチャヤ・ムイスリ』によって出版された類いの問いに関して労働者から非合法資料をあつめるのに，革命家のおびただしい勢力を空費しており（こういう仕事なら合法的活動家でもらくにかわってやれるのに），それでいて，よい資料はけつして手に入らないのである。というのは，労働者は，大きな工場のただ一つの部門のことしか知らない場合がしばしばであり，また，ほとんどいつでも，自分の労働の経済的結果は知っていても，労働の一般的条件や労働の基準のことを知らないので，工場職員や監督官や医師などがもちあわせており，新聞の小さい通信記事や，工業，衛生，ゼムストヴォ等の専門書のなかに大量に散在しているような知識を獲得することは不可能である。」[11]，と。

レーニンは同時に，次のように自分の過去の活動を反省さえしている。「わたくしは自分の『最初の実験』のことを，ついいましがたのことのように記憶しているが，わたくしはこうしたことをもうけっしてくりかえさないつもりである。わたくしは，わたくしのところによくたずねてきたあるひとりの労働者から，彼の働いていた大工場で行なわれているあらゆる制度をなにもかもききとろうとして，何週間もかかり切りで彼を『責めたてた』のであった。」わたくしは大骨を折り，かれは質問に答えるより残業の方がましだとこぼした。「われわれが革命的闘争を精力的に行なうにつれて，政府は，ますます『職業的』活動の一部を合法化しなければならないようになり，それによってわれわれの重荷の一部をとりのぞいてくれるだろう。」[12]，と。

「ラボーチャヤ・ムイスリ」派による1899年のアンケートが，どの程度に労働者活動家のあいだに普及していたのかはわからない。イワノフの編集した資料集で巻末非合法文献リストをみると，まさに1899年出版のこの文献が出ているが，指示のあるページに採録されているニコライⅡあて法務大臣ムラヴィヨフ H. B. Муравьев の報告（1901年12月12日は，1898年—1900年におけるロシア社会民主労働党イワノヴォ＝ヴォズネセンスク委員会の活動について）の中に記されている文献は，題名からして1896年版のアンケートか，あるいは1898年版のそれのように思われる。[13]

やがて,「ラボーチャヤ・ムイスリ」派の有力メンバーのプロコポヴィチC. Н. Прокопович はブルジョワ専門家へと転身する。自由主義者の「解放同盟」に参加し，1907～1908年にロシア技術協会がおこなったペテルブルグ工場労働者家計調査を担当し[14]，やがてはケレンスキー内閣の大臣となった。専制的あるいはブルジョワ的労働者調査と，これの批判的利用とが対立しあうことになる。

1) ともに『マルクス・エンゲルス労働組合論』（国民文庫）所収。
2) クループスカヤ『レーニンの思い出』青木文庫，上巻，21頁—22頁。
3) Рабочее движение в России в XIX веке, Сборник док. и матер., Том Ⅳ, Часть Первая, 1961 стр. 832.
4) Там же, стр. 1—2.
5) Л. Н. Кашкарева, Организация К. Марксом и Ф. Энгельсом рабочей статистики труда, Москва, 1968, стр. 59.
6) Там же, стр. 58—59.
7) Там же, стр. 62—64.
8) Там же, стр. 66—67.
9) Там же, стр. 67.
10) Там же, стр. 71—72.
11) 邦訳「レーニン全集」（大月版），第5巻，531頁。ただし若干訳しかえたところがある。
12) 同前，531頁。
13) Рабочее движение в России в XIX века, Сборник док. и матер., Том Ⅳ, Часть Вторая, 1963, стр. 505—513, стр. 887.